

間違えてしまったのです。目をむいて驚き、さしもの安倍貞任、宗任も馬の手綱たづなをぎゅっと引き締めたといいます。すると、馬がびっくりして、後退りしてしまつたというので、今でもその場所を「しまる至去」というのだそうです。安倍の軍勢は戦わずして引き返してしまいました。

源頼義、八幡太郎義家父子は、戦をしないで勝つた訳ですが、木幡山の北の方に勝屯内かつたうちという字が残っていて、その近くに八間石はちまかいしという平らな、大きい石があり、そこで、みんなで一晩飲み明かしたそうです。そして、その石に八幡太郎義家が乗っていた馬の足跡があるのだといえます。また、その下の方に関場という所があるのですが、ここでは、川をせき止めて関堀で馬を洗つたとか。ここにも馬の足跡があるということです。

これが陸奥鎮定ちんていの要因となり、朝廷に奏上そうじょうしたところ、後冷泉天皇はこの山を「木幡山」、山裾の別当寺院を「治陸寺じりくじ（陸奥を治める）」と名付けられ、宸筆しんぴつの額を賜つたのです。

以来、神仏の加護を深く信ずる里の人々は、源氏の白旗になぞつた手織りの五反旗を作つて木幡山を練り歩き、源氏の武勲ぶくんを称え合つたのです。そして、そのことが今に伝えられ続けているのです。

昔は、自分の家で織つた絹の白旗ばかりだつたそうですが、今では、それに色もつけた方がよいということになって、各「堂社どうしゃ」ごとに区切りをして、先達せんだ（案内人）という人が、白い旗を持つことになった訳です。また、買ってきた反物でも、山の木にひつかかつて裂けてしまつた物でも、女の人たちが縫い物をする、ちゃんと着物になるようになっていたといえます。そういう訳で、どこの家でも喜んで旗にする反物を出してくれたし、また、余つた反物は、背負つてお山参りをしたものだそうです。

現在、木幡の幡祭りは、毎年十二月の第一日曜日に行われています。